

企業名： 日東電工株式会社

当社の概要を説明していく。日東電工株式会社（以下、日東電工）は東証プライム市場の会社の一つであり、粘着テープなどの包装材料、半導体関連材料、光学フィルムなどを主に製造する会社である。現在はエレクトロニクス業界や自動車製品や工業製品など多岐にわたる分野で製品を提供し、全世界で事業を展開している。なお今回参考にしたのは Nitto グループ統合報告書 2021 である。

1. この会社が目指す姿が理解できるか

この会社の目指す姿・将来どのような会社になりたいかは、当社の経営理念と代表取締役社長、高崎秀雄氏のメッセージから伝わってきた。まず当社がミッションとして掲げる理念は「新しい発想でお客様の価値創造に貢献します。」というものである。このミッションを実現するために、当社が重視している考え方は、「Creating Wonders」である。統合報告書の1ページには当社の Vision がまとめられていた。

「一人ひとりが驚きと感動を生み出すことに果敢に挑戦する、すなわち、Creating Wondersを日々実践し、様々な分野で世界を変える原動力を生み出し続けていく、これが私たちのビジョン(Vision)です。」

この一文からもわかるように、統合報告書を通じて、当社が新しい価値創造に重きをおくこと、様々な分野で事業展開をすること、新たな変化を好み成長をやめない姿勢が理解できた。

この会社の競争優位性が理解できるか

私は当社の競争優位性を理解することができた。まずこの会社が持つ4つの技術についての言及がみられ、Nitto グループは粘着・塗工・高分子機能制御、高分子分析・評価技術の4つの基幹技術を複合・発展させ、様々な分野に応用し、事業を展開している。とりわけ粘着・塗工技術の競争優位性はこのグループ特有の特徴であると感じた。さらに偏光板や保護フィルムなどの競合他社が少ない分野での事業展開が成されている。これらは当社が優位性を持つニッチな分野でトップシェアを目指す、というニッチトップ戦略によるものである。4つの基幹技術などの自社の独自性を発揮できる分野に積極的に参入しつつ、ニッチな分野に焦点を当て、そこでのトップシェアを築くという戦略により、自社の競争優位性が維持されていることが分かった。私は自社の強みを理解し、分析し、新しい取り組みに力を入れつつ、力を注力する分野を見極め、競争優位性を最大限に生かすこの戦略こそが自社の競争優位性であるようにも感じた。

2. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

当社の競争優位性には持続性があると理解できた。なぜなら当社の掲げる「三新活動」、「ニッチトップ戦略」というビジネスモデルによって、当社の競争優位性を最大限に活かす仕組みが作られているからである。ニッチトップ戦略については先ほども言及したが、ニッチな市場に焦点を当てて、当社の独自性を発揮しいち早くその分野での競争優位を築くというものである。これに対して「三新活動」は“新”製品、“新”用途、“新”需要という3つの新に関して、開拓・開発を目指して掲げられた、Nitto グループ独自のマーケティング活動である。これにより、当社の競争優位性は保たれると思う。当社の代表取締役社長、高崎秀雄氏は、とりわけ変化の激しい現代では価値が永続することはなく、数年のうちに多くの製品は需要のピークが来て、需要が減少していくという認識をしている。そこで、当社は既存の製品あるいは技術の、他の分野、他の用途での使い方がないかを考えることに注力して、新需要や新たな価値の創出につなげている。これらのビジネスモデルによって、競争優位性を持つ分野に多くの競合他社が参入してきても、新たな価値を創出し続けることで、競争優位性を保つことができると考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

主に 41 ページからの人財についてのページを参照した。私はこの会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思った。人財育成については、グローバルレベルでのリーダー人財育成開発プログラムの実施や、海外グループ会社社長のサクセッションプランの策定などが人材育成として行われており、2020 年度は 2019 年度に行われたエンゲージサーベイの結果をもとに、従業員エンゲージメント向上への行動計画の策定や、コーチング機会の提供、職場内のコミュニケーション向上活動などが行われている。さらに 2023 年までの達成目標には従業員教育投資、年間総研修受講時間倍増とあり、人材育成への投資に積極的であることがわかる。加えて、従業員から新規事業を広く募集する、新規事業創出大会が行われており、クリエイティブな発想力や問題解決能力など、グローバルに活躍するために必要なスキルが自然と身につくような体制が整えられていることが理解できた。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

まず私が日東電工の統合報告書を見てよかったと思うところを書こうと思う。それは全体を通して図、グラフ、写真などが多く用いられていたところである。学生であり、知識も不十分である私でも、内容を視覚的に理解することができ、どのような取り組みなのか、どのような目標なのかなどが理解しやすかった。そのうえで私が感じた改善点は一つある。それは人財についてである。人財育成に向けて行っている取り組みやアプローチは理解できたが、BtoB ビジネスを主とするゆえに、職場で実際どの程度この取り組みが活かしているのか、よくつかめなかった。例えば実際にリーダー人財育成開発プログラムに参加した人の声や、職場内の人の生の声などを掲載することで、実際に、当社の人財育成システムが現従業者の

方々にどのような好影響をもたらしたのか、どのような利益が得られたのかなどがより伝わるのではないかと思った。

参考文献

Nitto グループ 統合 報告 書 , 「 Nitto グループ 統合 報告 書 2021」, <https://www.nitto.com/jp/ja/sustainability/report/>, 最終アクセス日 2022 年 7 月 18 日